



## 本との出会い、子どもと読書

社会教育課長 瀬谷真理子

私の生まれ育った地域には、図書館がなく公民館図書室がその役割を担っていて、子どもの頃に通ったその部屋は、現在のように地域の方々が読み聞かせしてくれることもない誰もいない部屋だったけれど、時間が止まったような静かな空間は、私にとって居心地の良い場所であり、本との出会いの場であった。日に焼けた表紙をめくり、お話の扉を開くその瞬間のわくわく感が楽しみだった。家には、テレビはあったけれど曾祖父のものだったので、子どもの私にチャンネル権はなく観たい番組を観ることはあまりなかったが、不満に思うこともなく、むしろメディアの雑音のない暮らしの中で、大人からお話を聞かせてもらう夕食後のひとときがとても好きだった。晩酌をしながら語る祖父の戦争の話や、祖父の相手をしながら語る祖母の昔話は、祖父母が亡くなった今も心の底に刻まれている。思い返せば、こころ豊かな子ども時代であったと思う。



本との出会いは、自分の子育てにおいても豊かさをもたらしてくれた。子どもが生後数ヶ月の頃、読み聞かせをしていて同じ場面で必ず声を立てて笑うことに気づき、笑顔見たさに何度も読んで聞かせた日々がなつかしい。共働きだったので、子どもを預けるための朝夕の送り迎えの車の中で、子どもとの会話には、いつも絵本の登場人物が現れた。帰りが遅くなってしまった日、初めて点滅信号を見て、絵本「ぴかくんめをまわす」が大好きだった息子は「ぴかくんは、おやすみなさいなんだね」と言った。また、「エルマーと16ぴきのりゅう」のお話を読み聞かせたとき、兄弟りゅうと再会する場面で、息子たちは静かに涙をこぼした。幼いなりに心を揺さぶられるような感動があることを実感し、改めて子どもにとっての読書の大切さを痛感した。登場人物に自分を重ね合わせ、お話の世界を楽しむことは、読書をとおして心を耕す貴重な体験となる。子育て時期の読み聞かせは、ほんの一時期のことであるけれど、振り返ってみると、絵本をとおして自分も子どもも豊かな時間を過ごすことができた。慌ただしい共働きの子育ての中で、私自身が元気をもらっていたのかもしれない。

日本には、優れた絵本、児童図書がたくさんある。特に日本の昔話絵本ほど優れた作品はないと私は思う。好きな絵本に「つるによぼう」(赤羽末吉 画)がある。芸術的な墨絵に美しい日本語が添えられている。抜粋で紹介すると～(略)「女房にしてくださいまし」たえいるようなあえかな声でした。(略)～『あえかな』とは、『かよわく、なよなよとしたさま』のことである。ことばそのものに難しさはあっても、絵が情景を語っているので子どもは絵を読み取って理解する。活字文化は、美しい日本語を伝えていく役割を持っている。子どもがよい本と出会うためには、大人の仲立ちが必要である。子どもと関わる方々が読書の重要性について認識を深め、推進が図れるよう支援に努めていきたい。

参考: 『ぴかくんめをまわす』松居 直/さく 長 新太/え 福音館書店 1966

『エルマーと16ぴきのりゅう』ルース・スタイルス・ガネット/さく わたなべしげお/やく 福音館書店 1965

『つるによぼう』矢川 澄子/再話 赤羽 末吉/画 福音館書店 1979

# 被災地の図書館は今！

～大熊町・富岡町の視察を踏まえて～

## 《福島県の図書館は今》

東日本大震災から2年半が経過した。県内の図書館活動の状況を見てみると、その多くが震災前の姿を取り戻しつつあるが、一方、現在でも原子力発電所事故に伴い避難を余儀なくされている自治体もある。

復興の状況を、「貸出冊数」（図書館設置自治体）を目安に見てみると、貸出実数は、平成22年度（震災発生年度）に比べ、平成24年度においては95.1%の状態にまで回復している。また、人口の減少もあることから、人口1人当りに換算してみると、98.6%という数値になる。

（「福島県公共図書館・公民館図書室実態調査報告書」調べ）

しかしながら、この数値の中には、震災後に新館がオープンした白河市と会津若松市が含まれており、新館効果による利用増が、全体の底上げをしている状況でもある。因みに、人口1人当りの貸出冊数は、白河市が3.61倍、会津若松市が2.37倍と大幅な利用増を見せており、この2自治体を除くと、貸出実数で84.3%、人口1人当たりで87.7%と減少する。

この他、同様の比較で利用を伸ばしている自治体に、喜多方市と南会津町がある。共に会津管内にあり、震災による被害が少なかったとも言えるが、広域利用やボランティアの活用、館内の整備など、それぞれの図書館施策における住民浸透とその効果の現れであると考えられる。

## 《旧避難区域の図書館》

原子力発電所事故の影響により、今なお7つの自治体が他の地域に役場機能の移転を余儀なくされている。これらの自治体には、4つの図書館があったが、休館したままである。

## 休館している主な図書館・公民館

大熊町図書館 平成25年	帰還困難区域内	図書館活動の再開準備は未定。 5月22日に館内を視察。（県立図書館）
双葉町図書館	帰還困難区域内	図書館活動の再開準備は未定。 6月17日、役場機能（埼玉県加須市）を県内に移す。
浪江町図書館	居住制限区域内	「浪江in福島ライブラリーきぼう」を福島市内に開設。 落下資料の排架に着手。
富岡町図書館 平成25年	居住制限区域内	落下資料の排架に着手。 6月20日に館内を視察。（県立図書館）
飯館村公民館	居住制限区域内	移動図書館車「こあら号」による、仮設住宅・仮設校への巡回貸出を開始。

大熊町図書館と双葉町図書館は「帰還困難区域内」にあり、現状では、施設内に立ち入ることは自由ではなく、再開を含めた今後の図書館活動の展開は未定である。

次に、「居住制限区域内」にあるのが、浪江町図書館と富岡町図書館である。この区域は、日中の立ち入りが可能であることから、再開を想定した活動の準備作業などを開始している。実際、地震により落下した資料の排架作業は、すでに終了している。

また、浪江町では、福島市笹谷地内にある仮設住宅に隣接する形で、仮設図書館「浪江 in 福島ライブラリーきぼう」を昨年8月に開設。3,000冊の図書を備え、近隣の福島市民にも開放している。



[浪江 in 福島ライブラリーきぼう]

なお、同じ「居住制限区域内」にある飯館村では、自力による図書活動として、仮設住宅と仮設校に対し、移動図書館車「こあら号」の巡回を始めている。



〔飯館村移動図書館車「こあら号」〕

この他、休館を続ける図書館としては、「避難指示解除準備区域内」の南相馬市立小高図書館がある。

#### 《大熊町・富岡町の現状》

県立図書館では、両町の了承のもと、それぞれの図書館への立ち入りに同行した。そこには、震災当時のままの図書館の姿が残されていた。

大熊町図書館は、ガラス面をはじめ建物に大きな被害はなく、館内はある程度守られている。視察に同行した建築士の見積もりでは、地震の被害としては軽微と判断された。しかしながら、人の介在しない建物の自然老朽化は否めないとの関係者談もある。



〔大熊町図書館・カウンター付近〕

また、移動図書館車は廃車手続きを完了したものであり、先の立ち入り時より進んでいる。

富岡町図書館は、館内を通る雨水管の損傷など、建物（複合施設）被害が見られるが、図書館内部での大きな被害はなかった。資料の一部に水害の痕跡もあるが、表面線量は他の資料と変わらない数値であった。



〔富岡町図書館・落下資料〕

#### 《資料のレスキュー》

本県では、津波による直接的被害を受けた図書館は無く、貴重資料の亡失という点においては、被害の程度は少ないといえる。しかし、先の大熊町・富岡町等の図書館にあつては、その復旧は、自治体の帰還の問題ともかかわることであり、今後しばらく時間がかかるとも思われるし、復旧への具体的な支援は、これから重要になってくるものと思われる。

また、地域資料等については、地域の文化遺産であり、図書館の基本的使命からも、当該図書館だけではなく、県立図書館と県内図書館が連携しながら、支援体制を構築する必要があると考えている。

（福島県立図書館 企画管理部  
専門司書 吉田和紀）

# レファレンス事例紹介

調査・相談カウンターとメールレファレンスサービスに寄せられた質問と回答を紹介します。

現在、福島市と米沢市の新たな架け橋となる「東北中央自動車道」の建設が進められており、万世大路の初代栗子山隧道からは四代目となる新・栗子トンネルが施行中です。完成すると全長約9キロの、東北一長い道路トンネルになるそうです。

参考：福島河川国道事務所 (<http://www.thr.mlit.go.jp/fukushima/>) 当館調査・相談カウンターには、福島県内の物事に関する質問が多く寄せられますが、今回紹介するのは、この福島市と山形県米沢市を結ぶ道、**万世大路**についてです。

## 質問：<sup>ばんせいたいろ</sup>万世大路について知りたい

### 【回答】

初代山形県令・三島通庸によって建設が始まった一代目の栗子山隧道を含む道路。完成したのは明治14（1881）年9月で、開通式には巡幸中の明治天皇も参加され、翌明治15年には勅により「万世大路（バンセイタイロ）」と名付けられました。この当時の万世大路の様子を知るものとして、当館所蔵の貴重資料『栗子隧道十二景 栗嶺奇観』があります。これは南画家菅原白竜が、明治14年7月、完成間近の栗子隧道を歩き、その眺望に感動し、景色を12枚の彩色画として描いたものです。こちらの資料は当館HP (<http://www.library.fks.ed.jp/>) のデジタルライブラリーや、CD-ROM化した貸出用の資料でご覧いただくことができます。

昭和に入ると、人馬の通行から自動車の通行できる道へと改修を余儀なくされ、昭和8年4月から着工、昭和11年に竣工し、二代目となる栗子隧道が開通しました。

昭和30年代には交通量の増大に対応できるようルートの見直しが行われ、現道である国道13号が昭和41年5月29日に開通。三代目となる東栗子トンネル、西栗子トンネルが完成しました。こうして旧道となった万世大路はその役目を終えることとなりましたが、現在もこの福島ー山形間の道は万世大路の名前で、人々に親しまれています。

明治の開通から、時代とともに変化を続けてきた万世大路。その新たな歴史が、もうすぐ幕を開けようとしています。

### 【参考資料】

- ・『LINE vol. 33』 東北地方道路広報連絡会議/監修 東北建設協会 2000 L514/T1/1
- ・『国道13号（福島～栗子）』 建設省福島工事事務所/編 [建設省] [1971] L514/K1/3
- ・『福島市史 第13巻 索引・年表』 福島市史編纂委員会/編 福島市教育委員会 1976 L211/F6/13
- ・『福島県直轄国道改修史 昭和6-昭和37年』 建設省東北地方建設局福島工事事務所/編 [国土交通省福島河川国道事務所] L514.1/K1/4
- ・『万世大路を歩くー福島・米沢を結ぶ歴史的幹線道路に関する調査報告ー』 阿部公一/監修 万世大路調査研究実行委員会 2010 L514/A1/2

当館では、調査の参考となる資料をテーマ別にまとめた「本の森への道しるべ」を発行しています。調べたいものがある場合や、より多くの資料をお探しでしたら、ぜひご利用ください。

## ◆◆ 『福島県立図書館アクションプラン（第2次）』について◆◆

当館では、平成17年10月に『福島県立図書館「学びの環境づくり」』を策定し、図書館のあるべき姿を示すとともに、その実現のため取り組むべき施策として、平成20年3月に『「県民を支える図書館」アクションプラン』を策定しました。

平成24年度までの5年間の実施期間では、高等教育機関とのネットワーク体制の構築や個人宅配サービスの開始など、県民の利用環境の充実に努めてまいりました。

このたび、実施年度が終了するに当たり、東日本大震災等による被災からの読書環境の復興と、社会の進展に伴う読書環境の変化に対応するため、『福島県立図書館アクションプラン（第2次）』を策定いたしました。

平成25年3月に策定した新プランでは、当館の行動指針として、「4つの方針」と「9つの行動」を掲げ、「全ての県民の皆様に、より良い図書環境を提供します」とした理念の実現に向け、事業の展開を図るとともに、評価を行い、公表していくこととしています。

◆基本理念 「全ての県民の皆様に、より良い図書館環境を提供します。」

◆4つの方針と9つの行動

I 東日本大震災等により失われた読書環境、学習環境を取り戻します。

- 1 東日本大震災等の記録をのこします。
- 2 支援態勢の基盤を整備します。
- 3 読書環境・学習環境の整備を通じて「ふるさと再生」を支援します。

II 県民一人ひとりのお役に立てるよう図書館環境を整えます。

- 1 県民が必要とする情報を提供します。
- 2 県民が利用しやすい環境を整備します。
- 3 県民と共に歩む図書館を目指します。

III 福島県の子どもたちの読書活動を推進します。

- 1 『福島県子供読書活動推進計画（第2次）』に基づき、県立図書館の役割を果たします。

IV 「図書館の図書館」として、図書館の振興を図ります。

- 1 図書館・公民館の活動を支援します。
- 2 高等教育機関、文化施設等関係機関との連携を図ります。

## ☆「東日本大震災福島県復興ライブラリーブックガイド」

平成23年3月に発生した東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所事故とそれに伴う県内の被災・復興についての関連資料を「東日本大震災復興ライブラリー」として、平成24年4月28日より開設しました。これまでに4,221タイトル以上（平成25年3月11日現在）の資料を収集・整理し、皆様にご活用していただいております。当館の司書が「東日本大震災復興ライブラリー」の資料を実際に読み、感じたことをお伝えするため、ブックガイドを発行しています。

これまで、第5号まで発行しています。

## ☆東日本大震災福島県復興ライブラリーを出張展示いたします。

図書館・図書室を対象に、次の3つのテーマの資料をセットで貸出ししています。ぜひご利用ください。

- ① 忘れない！東日本大震災・福島第一原発事故（写真集中心）
- ② 震災・原発事故…被災の体験を伝える（体験記中心）
- ③ 放射線を知る・震災後の心を癒す

## ☆福島県地域資料（福島県関係資料）ご寄贈のお願い

福島県立図書館では、福島県の過去・現在を未来へ伝える資料として、福島県に関する資料、福島県にゆかりの方の著作物を収集・保存し県内外の利用に供しています。

福島県や福島県内各地に関する資料、福島県に縁の方の伝記等を刊行された際は3部、福島県に縁の方の著作につきましては2部ご寄贈いただけますよう、お願いいたします。

また、福島県立図書館では平成23年3月11日に発生した東日本大震災とそれに伴う福島県内の被災・復興に関する資料を、特に重要な資料ととらえ、重点的に収集に取り組んでおります。

- ・震災関連の写真集・記録集等
- ・被災に関する調査報告書、復興に関する計画書・報告書、自治体が発行した広報誌の震災特別号等
- ・被災地で発行されたミニコミ誌・フリーペーパー等
- ・個人が発行した手記、詩集等（自費出版物も含みます）

これらの資料を刊行された方は、ぜひ2部ご寄贈いただけますよう、お願いいたします。

【お問い合わせ】〒960-8003 福島市森合字西養山1番地  
福島県立図書館 資料情報サービス部 地域資料チーム  
TEL 024-535-3218 E-mail [chiiki@library.fks.ed.jp](mailto:chiiki@library.fks.ed.jp)

## ◎図書の寄贈（平成24年度）

次の団体より図書の寄贈がありました。このほか、被災地支援として多くの方から多数のご支援をいただきました。福島県立図書館をとおして広く皆様の利用に供させていただきます。

### ■宗寿寺（新潟県阿賀野市）

図書 150 冊(150,000 円相当)

■恵泉学園 図書 641 冊

■楽天株式会社 図書 182 冊

■明治安田生命相互会社営業教育部

図書 1,098 冊

■東日本大震災で被災した子どもに本を贈る「いっしょだよ」キャンペーン

図書 177 冊(250,000 円相当)

■(財)福島県教職員互助会

図書 1,244 冊(2,000,000 円相当)

■福島信夫ライオンズクラブ

児童図書 54 冊(70,000 円相当)

■日産自動車株式会社・日産福島会

第28回ニッサン童話と絵本のグランプリ受賞作品童話賞・絵本賞の2作品を190冊

■国際ゾンタ福島ゾンタクラブ

児童図書 74 冊(100,000 円相当)

■岡山県立図書館 図書 860 冊

■国際ソロプチミスト福島

児童図書 69 冊(100,000 円相当)

■新潟県立図書館古本再生市実行委員会

児童図書 100 冊

第63巻（通巻267号）

平成25年10月22日

発行 福島県立図書館

〒960-8003 福島市森合字西養山1番地 TEL:024-535-3218(代表)

ホームページ URL : <http://www.library.fks.ed.jp>